

A Brief History of the Orthographic Change among the Yucatec Maya

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004411

ユカテクマヤ語の正書法の歴史

——マヤ人の文字使用との関連において——

八 杉 佳 穂*

A Brief History of the Orthographic Change among the Yucatec Maya

Yoshiho YASUGI

The Maya had been using a special writing system since the third century, but it had been almost forgotten in the sixteenth century, when the Spaniards entered the Yucatan peninsula.

Since then the Yucatec Maya have used an alphabetic system which may have been invented by the Spanish priest Luis de Villalpando and his companions. The orthography, once settled, did not change except for some letters for [p'], [t'], [s], etc. (Table 1). In the eighteenth century the Yucatec grammarian Pedro Beltran tried to change the writing system systematically, under the influence of the reform of the Spanish orthography. In the nineteenth century Carrillo y Ancona introduced a new orthography, but with the exception of dz for [ç'], its system was not accepted by those who followed. Meanwhile, Yucatec Maya indians left many documents in which they used traditional orthography but spelled words in many different ways (see, p. 103). Nowadays the Yucatec Maya use four major and different systems—traditional, international, Cordemex, and Cartilla-Bible. However, Yucatec Maya indians have almost no opportunity to write their language and show no concern about the systems.

- | | |
|------------------|----------------|
| 1. はじめに | 3. 1746年から現代まで |
| 2. 征服直後から1746年まで | 4. むすび |

* 国立民族学博物館第4研究部

1. はじめに

マヤ人の文字の使用について論じようと思えば、マヤ文字の起源からときはじめなければならぬであろうが、マヤ文字については簡単にふれるにとどめ、本論では、ユカテクマヤ人の16世紀以後の文字使用を主に扱うことにしたい。

マヤ文字で年代がはっきりしている最古のものは、ティカルの石碑29号で、西暦になおすと292年であるが、そこに刻まれている文字はすでに発達した形を示しており、マヤ人が文字を使いはじめたのは、それよりずっと以前、おそらく紀元前にさかのぼるものと思われる。以後909年までの間に、碑が1000以上も刻まれている。その他土器や壁画、骨片などにも文字は残っている。

それらの文字を使用したのは、おそらく王、神官、貴族などの一部のエリート層に限られていたものと思われる。しかしそうした碑や土器などをつくったのは、文字を理解できない職人階級であったにちがいない。碑に刻まれた文字にはほとんどまちがいがいがないが、それでもいくつかのまちがいが碑文中にみられるからである。それらを訂正することなくそのまま残しているのは、彼らの文字に対する考えを知る上で興味深い。石であったことも関係あるろうが、もし神聖なものなら、まちがうはずがなく、たとえまちがったとしても、やりなおすであろう。そうでないということは、おそらく一度文字が刻まれてしまえば、そこに魂がやどるとか、力をもつとか考えられたからにちがいない。

碑文に限っていえば、5年、10年、あるいは20年に1本の割合でしか建てられていないのも、当時の文字使用を考える上で、大切な要素である。石に石で刻んでいくのであるから、碑をつくるためには相当な期間を必要としたにちがいないが、5年または10年または20年に1本とは、あまりに少なすぎるように思われる。当時文字はいろいろな場合に使用されていたと想像されるのであるが、非常に限られた機会しか記録として残されることがなかったのではなからうか。

マヤ文字の使用について考えるには、時代の変化、地域的な差、取り扱った内容などについてふれていく必要があるが、それらはマヤ文字を扱うときにして、先を急ぎたい。

マヤ文字はその後も使用されつづけたが、残っているテキストの中で重要なものは、碑文ではなく絵文書となる。イチジクからつくられた紙に石灰を塗り、その上に黒や赤、青などの色を使って文字や絵を描いたもので、その材料は著しく碑文と異なる。材料ばかりでない。内容も異なっている。しかしもちろん碑文時代（古典期292～909

年)にも絵文書は書かれていたにちがいがなく、たまたま残っているものが、それ以後に写されたものであるにすぎない [cf. ANGULO V. 1970; THOMPSON 1971: 23]。

征服後も限られた人のうちで文字は使用されていたが、ほぼ消滅の危機に頻していた。もっともペテンのイツァ族の間では、17世紀にも文字が用いられていたことが、Avendaño の記述からわかる [MEANS 1917: 141]。しかしそれは残っておらず、現在残っているものは、ランダのアルファベットと称されるものと、Landa の『ユカタン事物記』やいくつかのチラム・バラムの書に残る暦の文字だけである。

そうしたマヤ文字の言語は、ユカテクマヤ語の可能性が高いことはすでに論じた [八杉 1982]。それゆえ、ユカテクマヤ語がマヤ諸語のなかで一番重要と考えられるので、征服後彼らがどのようにアルファベットを得て、用いていったかを考察してみたいのである。なおマヤ族の征服後の文字の使用は、その他キチ族やカクチケル族などにもみられることをつけ加えておきたい。

2. 征服直後から1746年まで

マヤ人がはじめてヨーロッパ人と接触したのは、コロンブスの第4回目の航海のときと思われるが、最初に深くユカテクマヤ語を学んだのは、Valdivia を隊長とする舟が難破し (1511年)、ユカタン半島の東海岸に漂着した人々のなかの生き残りの二人、Jerónimo de Aguilar と Gonzalo Guerrero であった。彼らのうちマヤ人化した Guerrero の方は、ユカテクマヤ語を記すことはなかったにちがいがなく、Aguilar の方は Cortés に仕えたので、ユカテクマヤ語を断片ながらも記す機会があったかもしれない。しかしユカテクマヤ語を学び、研究し、体系的に書き記しはじめたのは、キリスト教の布教にやってきた神父たちであった。

メソアメリカでは、征服当時、数多くのことばが話されていた。共通語としてスペイン語が用いられるようになったのは、それが一つの原因であろうが、インディオをキリスト教化するには、スペイン語では効果がなく、神父たちは、まず彼らの話することばを学ばなければならなかった。ユカタンでは、ユカテクマヤ語が話されていた。通常ユカテクマヤ語のことをマヤ語というが、この術語は、マヤ諸語全体をさす場合に用いられ、碑文時代のマヤ族のことばをさす場合に用いると便利であったりするので、ここではユカテクマヤ語ということにする。

征服者たちは、1541年にカンペチュを、1542年にはメリダを建設し、征服は一応完了した。修道院が建てられ、神父たちはスペイン語を教える一方、ユカテクマヤ語を

学ぶことに専念したのである。神父たちにとってはキリスト教の布教が第一の仕事であり、キリスト教の教義をユカテクマヤ語になおすことに重点がおかれたが、それとともに言語の研究も必然的におこなわれた。散逸してしまって名だけしか伝わらないものもあるが、文法書や辞典などはかなりの数にのぼっている。以後今世紀に至るまで、ユカテクマヤ語を記したのは、神父たちばかりでなくユカテクマヤ人自身もいたが、ユカテクマヤ語を研究してきたのは、19世紀に現われる言語学者を除くと、まず例外なくこれらの神父たちであった。

おそらく正書法が確立したのは、カルロス5世 (Carlos V) が1544年にヌエバ・エスパーニャに送った200人あまりの神父のうち、ユカタンに派遣された5人の神父、またはそのうちのどれかによるものと思われる。彼らは1546年にカンペチェに着いている。5人の派遣神父の長であった Luis de Villalpando について次のような記述がある。

「(ユカテクマヤ語を) もっともよく知っている人は Luis de Villalpando で、身ぶり手ぶりなことばを学び始め、それをある種の文法書にまとめ、キリスト教の教義をそのことばで書いた」 [LANDA 1938: 97-98]。

現在彼が最初の文法書を書いたとみられているが、残念ながら残っていない。文法書を書いたからには、ユカテクマヤ語を表記したことはまちがいない。

また5人のうちの1人 Juan de Herrera については次のような記述がある。

「ロサンジェルス州の平修道士 Juan de Herrera は、教義をインディオ、特に子供たちに教えた。学校を建て、読み書きや聖歌を教えた」 [LIZANA 1893: 47v-48r]。

「……ことば (ユカテクマヤ語) を学び、キリスト教の教義をインディオ、特に子供たちに教えることに没頭した……」 [LÓPEZ DE COGOLLUDO 1957: Libro V-cap. V]。

「学校をこしらえ、読み書きを教えた」とあり、おそらく Herrera はスペイン語の読み書きを教えたと思われるが、同時にユカテクマヤ語の読み書きも教えたものと思われる。

彼らがどのようにユカテクマヤ語を転記したか定かではない。しかし今、1567年に10人のマヤ族の首長がスペインのフェリペ2世 (Felipe II) に送った手紙がある (以後これを『手紙1567』と略す) [MARTÍNEZ HERNÁNDEZ (ed.) 1929: 57-61]¹⁾。本

1) Carta には、Motul のものと Zimmermann [1970] のものの2つの版がある。両者を比べると、Zimmermann の版にはまちがいがあることがわかる。両者とも写本である可能性は否定できないが、このうちのどちらかが原本であるとする、Motul 版とすることができる。Zimmermann 版にはまちがいが見られるので、ここでは Motul 版を使うことにした。

文が25行の短いものであるが、そこにはユカテクマヤ語を表わすために必要な文字がすべて含まれている。それはそれ以後のユカテクマヤ語の書き方とほぼ同じであるので、これを使い、使われている文字をみることにしたい²⁾。

p	t	tz	ch	c	{i y j}	e	a	o	{u v}
pp	th	o	ch	k	(ii ij)	ee	aa	oo	uu
b									
{s z ç}	x	h							
m	n								
l									

{ } でくくった文字は同一音を表わす変異体、すなわち異文字であり、() はこのテキストにはたまたま現われないが、他のテキストから存在することが確かな文字である。

おそらく神父たちが最初につまずいたのは、スペイン語にない音、特に声門閉鎖音と呼ばれている一連の音の表記であったにちがいない。

p, t, ch の音の声門音は、pp, th, ch とスペイン語にあるアルファベットに少し手を加えることで解決している。

[k] とその声門音 [k'] については、c と k の文字を使っている。スペイン語では、i と e の前は qui, que と書き換えるが、ユカテクマヤ語では、そのまま、つまり ci, ce である。スペイン語における非体系的な書き方をナワトル語のようにそのままひきつぐことなく、体系的に改めたことは、特記しなければならないであろう。ただし『ユカタン報告書 (*Relaciones de Yucatán*)』(1579-81) にみられるように、スペイン語式に queh, qui などと書いたものもある。しかし、こういう例は例外的である。ただ ç の文字を使ったため、cedilla を忘れると [k] になる問題がある。ç と c は [s] と [k] というまったく違った音を表わす文字であるので、cedilla を忘れると、まったくちがった意味になる。実際そういう場合があるので、ユカテクマヤ語を読む場合、特に注意しなくてはならなくなっている。

[ç] とその声門音 [ç'] の場合、その音をあらわす文字がスペイン語になかったのであるから、tz という書き方を採用するにも相当苦勞したにちがいない。ましてやその声門音となると、もう新しい記号を發明する以外に手がなかったであろう。その際 c のひっくり返った文字 o を採用したことは、かなり興味深い。その他のアルファベットを利用せず、なぜそれを採用したのか。それは [s] 音とある種の音の似かよりを

2) 各文字の音価については、表1を参照されたい。

感じたからではなからうか。その際 s や z はみでの通りひっくり返しても同じ形であるから、使えず、ce や ci を表わす場合の c を使ったのではなからうか。辞書の項目の順番からみても、[s] と [ç] の似かよりに感じたにちがいないことがわかる。たとえば、ユカテクマヤ語の現存する最古の辞書『モトゥル辞典』では、a, b, c, z, tz, o, ch, çh, e …… という順になっている。tz が t の次ではなく z [s] の次に置かれているのである。

ç, z, s は1つの音 [s] の異文字である。『手紙1567』の場合、s は castilla のようなスペイン語の単語にしか使われていない。ç と z は区別なく使われるが、『手紙1567』の場合、ç が圧倒的で、z は1例にとどまっている。

v は [u] と [w] の音を表わす場合に用いられ、u と区別なく用いられている。s, ç, z の場合と同様、v と u はその後も区別なく用いられている。それと同じような使い方は [i] の場合にもある。ただ y は単語の初頭に用いられ、j は『手紙1567』の場合には pikanacoon にみられるように i のかわりに用いられることもあるが、ij のように、i が2つ続くときに2番目の i のかわりに使われている。これは i? を表わす場合がほとんどである。

いま述べた子音は、すべてのちの文献に踏襲されている。ただし [p'] の場合、p, pp, pp, [t'] の場合、th, th と少し書き方に変異がみられる。

母音の場合、i, e, a, o, u とそれを二重にしたものの2種類ある。『手紙1567』の場合 ii をみいだせなかったが、これは短文のためと思われる。一見すると二重母音は長母音のように思われるが、v?v の場合がほとんどである。現在ユカテクマヤ語には長母音 (vv) ならびに v?v があるので、この2つの場合をすべて vv と書いた可能性がある。しかし長母音はなかった可能性も考えられる。それゆえ母音の問題は今後の課題として、こののちおもに子音を扱うことにしたい。

おそらくいまみてきた正字法は Villalpando らによって確立されたものと思われる。

しかし1550~60年代に書かれた Landa の『ユカタン事物記 (*Relación de las cosas de Yucatán*)』や『ユカタン報告書』をみると、決してしっかり確立していたものとは思われない。Landa の書は後世の写本であり、これから述べることも出版された本からであるので、若干問題も残るが、Landa のユカテクマヤ語の書き方は決して正確でなかったということが出来る。特に声門音の表記と [ç] と [ç'] の表記に問題がある。たとえば、ユカテクマヤ人が書いたものでは chichenitza, eanab, kukulcan と正しく表記されているものが、『ユカタン事物記』では chicheniza, ezan-

ab, cuculcan と書かれている。また Landa は pa (割る) と ppa (あける) を逆にしている。これは筆者が調べることができた 6 版の Landa の書ですべてそうである。写字生のまちがいの可能性が高いが、その他のユカテクマヤ語の表記を考え合わせると、Landa は声門音の重要性を十分認識していなかったように思われる。Landa が表記したユカテクマヤ語の中でもう一つおもしろいのは、cezalcuati である。これはメキシコの神 Quetzalcoatl のことで、ユカテクマヤ語では kukulcan という。[ke] はナワトル語では que と転写されたにもかかわらず、Landa はユカテクマヤ語の表記に従い、ce と書いている。Landa は tza を表記しなかったが、ここでも tza を za と書いている。Landa の z の発音は tz に近かったのかもしれない。cuati は蛇 (coatl) のことであり、語尾の tl が ti になっているのは、おそらく tl が t に変化したタバスコあたりのナワ語、すなわちナワトル語ではなくナワット語から借用されたからにちがいない。ユカタン人はナワ語をアステカからではなく、タバスコあたりから受け入れたことは、『ユカタン報告書』の moxopipe (muxppipp) の項に Quetzalquat とあることや、チラム・パラムの書にあらわれるナワ語からもわかる。

『ユカタン報告書』でも同様で、書法は正確でない。例を挙げてみよう。左は古典ユカテクマヤ語の表記、右は『ユカタン報告書』に現われる表記である。なお、* は Gaspar Antonio の助けをかりた *Relación de la ciudad de Mérida* という報告書に現われる表記であり、その他は *Relación de Mama y Kantemo* にみられる表記である。

ek	黒い木	*er
kuche	杉	*cuche
kokob	蛇	*cocob, cokob
ci	マゲイ	*qui
ceh	鹿	queh
pic	スカート	piq
iz	いも	*ys
ah chom	はげわし	*ah chom

その当時のユカテクマヤ人はどうだったか。そのころユカテクマヤ人のなかでもっとも活躍していたのは、おそらく Gaspar Antonio であったと思われる。彼の母はマニの首長 Tutul Xiu の娘で、父は Tutul Xiu の神官であり、1531年頃誕生し、スペイン人に教育をうけ、いわば公式通訳者のような活躍をしていた。Landa も彼を

情報提供者としているし、『ユカタン報告書』のいくつかは彼の助けをあおいでいる。マヤ文化をもっともよく理解していた1人であるが、彼の助けをかりた Landa の書や『ユカタン報告書』のユカテクマヤ語の書き方をみると、いまみてきたように、正字法に則った正しい書き方がなされているとはいえない。もし彼が正確に言語音と文字の関係を知っていたなら、このような不首尾な書き方を許すことはなかったにちがいない。

しかし『モトゥル辞典』では、先に述べた書き方が用いられており、ひきつづきそれは正字法として用いられる。『モトゥル辞典』とはすでに述べたように16世紀の後半に作られた、ユカテクマヤ語では最重要の辞典である。『モトゥル辞典』の項目をあげると、次のようになる。

a, b, c, z/ç tz, ɔ, ch, ch̃, e, h (rezia), h (simple), y, i, k, l, m, n, o, p, pp, t, th, v/u, x

例文中には s も j もあられ、先にみた『手紙1567』とまったく同じ文字がつかわれている。ただ興味をひくのは h の項が2つあることである。すなわち強い h (h rezia, ħ) と弱い h (h simple) である。後者はたとえば所有代名詞の w(u)や y がつくると失われる。

huun 手紙, yuun Pedro ペドロの手紙 [CORONEL 1620]。

halmah thanil 命令, ualmah thanil 私の命令 (San Buenaventura 1684 in [MARTÍNEZ HERNÁNDEZ (ed.) 1929])。

しかし強い h は失われることはない。この h はただ初頭に来る場合しか『モトゥル辞典』では区別されていない。しかし ħ と h のように区別されてはおらず、すべて h で書かれている。そのため音素として2つの音があったかどうかわからない。しかし ħ [x] と h [h] の音の区別をもつ高地マヤ諸語のたとえばケクチ語と比較すると、対応がはっきり認められる。それゆえ1600年頃には音素として区別する必要は十分に認められなかったかもしれないが、実際は語頭では識別できるほどの差があったということができ、またそれ以前にはユカテクマヤ語にも [x] と [h] の音素があったと推測できる。以後この [x] と [h] の区別は、Coronel [1620] はもちろん、San Buenaventura [1684] の文法書まで記されている。しかしそれ以後はもはや両者のちがいは認められていない。

Coronel の文法書は現存する最古の文法書である。この文法書にはのちの文法書にみられる音の説明がないが、使われている文字は『モトゥル辞典』のものと同等である。もっとも Coronel の文法書も『モトゥル辞典』も1929年に出版されたものしか

調べることができなかつたので、そう断言するのは幾分はばかれるが、1929年版の前書きに、手稿を尊重し、その正字法を守ったとあるので、まず問題なからう。この時代のもので手稿を確かめることができたのは『ヴィエナ辞典』である。Barrera Vásquezによると、16世紀の終りから17世紀の初めにかけて編まれたものという[BARRERA VÁSQUEZ (ed.) 1980: 23a]。これはスペイン語—ユカテクマヤ語辞典であるが、ここに使われている文字はこれまで述べてきたものとかわらないので、この点からみても問題なからう。

San Buenaventura の文法書は第2番目の文法書で、その次に Beltran の文法書が1746年にあらわれる。これを古典ユカテクマヤ語の三大文法書ということができる。

ところでマヤ文字には、いわゆるランダのアルファベットをみてもわかるように、いくつかの音声記号があった。そうした文字記号を用いてユカテクマヤ語を表わすことがなかつたのは、それらがアルファベットに比べて圧倒的に不便であったためであろう。しかしそれ以上に、土着文化の弾圧が大きな原因であったように思われる。たとえば Landa は、

「我々はこれらの文字で書かれた本をたくさんみつけた。これらは悪魔の迷信と虚偽のほかなにも含まないもので、焼きすててしまった。そのため、彼らはおおいに驚き苦しんだ」[LANDA 1938: 207]。

と書いている。おおいになげいたのは彼らばかりではない。のちのマヤ学者すべてがなげいた仕業である。

18世紀に入ると、さきほど述べた古典ユカテクマヤ語の三大文法書の最後である Beltran の文法書が出る。この頃までに言語的な変化がおこっている。彼は正字法の改革をはかっている。すなわち、ç のかわりに z, v のかわりに u を用いることにしたのである。ç の場合、cedilla を忘れる可能性が高いから z にかえた方がよいといっている。その点からいえば、p を二重の pp にしたのも賢明な処置といえよう。たとえ p の棒を忘れても p が二重だから p とまちがうことはない。ch の声門音の場合、これまでの書法を守り ch としている。印刷物に限らず、写本でも ch の h の棒を忘れる場合が少なからずあるので、ç の場合と同じである。これをそのままにするのは、ç の cedilla を忘れる可能性が高いから z にかえたという理由が薄れるであろう。t の声門音の場合、th ではなく th としている。この場合も h の棒を忘れる可能性が高く、ç の場合と同じである。それゆえ、Beltran の提案は、その当時のスペイン語の正字法の改革と時を同じくしており、Beltran はただ単にスペイン語の

正字法の改革をユカテクマヤ語に適用させただけということができよう。

一音二字がユカテクマヤ語にも用いられているが、これは決して好ましいことではない。th を th とかえたのも、たとえば pat-hal (調べる, 終る等) のように [pathal] と [pat'al] の二通りにとれる曖昧さを避けるために、th としたとも考えられる。その点からいうと、ch という一音二字もまずいことになる。zuchal (馴れる) のような場合、[sukhal] であるが、[sučal] と読めるからである。この曖昧さは避けられていない。

Beltran の正字法の改革は、手許の第2版では全篇にわたり守られているが、のちの書において採用されたわけではなかった。18世紀, 19世紀においても, ç の例をみることができるし, ç, z, s は区別なく用いられている。u と v の場合も同様である。

3. 1746年から現代まで

Beltran の正字法の改革は、改革といってもおおげさなものではなく、単に z と u の使用に注意を促したにすぎないものであったが、Beltran の頃までに大きな変化が言語面ばかりでなく、文化面にまでおこったようである。言語面で目につくものは確実未来形といってもよい -om の消失、他動未来の接尾辞 -Vb の -e への変化、受身の接尾辞 -abal の -aal (-aʔal) への変化等があげられるが、非常に大きな変化がマヤ暦にもあらわれる。古典期時代から1カトゥンは20年であったが、この時期に24年が1カトゥンになり、しかもカトゥンの終りのアハウの日でそのカトゥンは名付けられていたのが、最初の日と解釈されるようになったことである。それゆえ Beltran の文法書ができた年をもって、本論は2つに区切ることにしたのであるが、それが正当であるかどうかはこれからの研究にまたねばならないし、その原因についてもくわしく検討する必要がある。

これまで述べてきたものの中心は、スペイン人をはじめとする異国人、またはメスティンによるものであった。18世紀になると、ユカテクマヤ人の手になるものが増えて残っている。その一つにチラム・バラムの書と称されている一連の書物がある。ユカタンの村々に保存されていた、ユカテクマヤ語で書かれた書物であり、内容はユカテクマヤ人の伝承やヨーロッパの暦の翻訳等、多岐にわたるが、いずれもチラム・バラムの書と呼ばれている。これらの書物は保存されていた村の名を冠して、たとえば『チュマイェルのチラム・バラムの書』とか『ティシミンのチラム・バラムの書』とか呼ばれる。これらの書物は征服後まもなく書かれはじめたにちがいないが、現在

残っているのは、18世紀以降の写本、または18世紀以後に書かれたものである。その他には『バカブの儀式 (*Ritual de los Bacabes*)』や『カルキニ年代記 (*Crónica de Calkini*)』等の書物や土地文書等がある。

これらの文書は書体のみだれたところもかなりあるが、相当注意深く書かれたものにちがいがなく、書きまちがいはほとんどない。しかし書き方は首尾一貫していない。典型的な例として『チュマイェルのチラム・バラムの書』の2頁に生起することばをとりあげてみよう。

v hool poop	v hol upoop	v hol upop
v hool. v poop		u hol u pop
		u hol upop
		u hol pop
		v hol pop

その書き方には上のような変体が見られる。

ユカテクマヤ語では、省略形は *yetel* を *y* または *.yt.*, *ye* などに省略する場合があるだけで、まず省略形は用いられない。しかし『チャンカフのチラム・バラムの書』では、非常に省略が多い。一例として *yahal cab* (夜明け) ということばがどのように書かれているか挙げてみよう。～と . を使い、まるで省略できるあらゆる可能性を追求しているようである。

y. hal cab	y. hl. cã.	yahã. c.
y. hl. cab	yahal cã.	yahal c.
y. h. cab	yahã. cã.	y. ha. c.
yahl. cab	ÿ. h. cã.	
y. h. cab		
yh.l cab		
ÿ. hl. cab		

[*Chilam Balam de Chan Cah 1982: 1-4*]

単語と単語の間はふつう区切られているが、一単語でも音節的に分けられている場合も多い。『チャンカフのチラム・バラムの書』では、行がえの一単語が二行にわたるとき、*ha-ch* (おおいに), *na-k* (おなか), *uin-icil* (人) などのように、音節的に区切られていない場合もたくさんみられる。

これらの文書にはまた、句読点や大文字も用いられているが、句読点はかならずしも文や句の区切れにあるわけではないし、大文字も文の始めや人名などに使われているわけではなく、原則がない。

1840年代から50年代のいわゆる Guerra de Casta 時代の手紙が、メリダの図書館の Carrillo y Ancona のコレクションに保存されている。これらにより19世紀中葉に使われた文字がどのようなものであったかわかるが、それらは、チラム・バラムの書に使われている文字やそれ以前の文字とかわるところがない。

Carrillo y Ancona は司教であったばかりでなく、19世紀末の大文化人であり彼自身多くの著書を残している。彼の代表作の一つ『ユカタン古代史 (*Historia antigua de Yucatán*)』には次のような表記がみられる。

p t tz ch c (qui, que)	{s z} x h
pp dt dz dch k	m n
b	

t, tz, ch の声門音を dt, dz, dch としており、ある意味では体系化をはかった表記とみることができる。しかし [k] 音の場合、スペイン語式に i と e の前は qui, que として、その体系的な表記法をみだしてしまっている。ここでとりあげておきたいのは dz である。この dz は今日ユカテクマヤ語の [tʃ] の表記として広く用いられており、誰が最初に用いたのか興味がわくのであるが、筆者の調べえた範囲では、彼が最初である。しかしながら dz という表記は、ユカテクマヤ語になじみのない人にとっては、かなり誤解を生む表記である。

近代の最良の文書法は、López Otero の『*Gramática Maya*』[1914]と思われるが、その書の使用文字は伝統的な書法を用いている。この当時、Carrillo y Ancona にみられるように、正字法の改革の試みがおこったが、依然伝統的な書法を守る人もいたということができる。

1921年には Tozzer の『*A Maya Grammar*』がでている。16世紀からその当時までのユカテクマヤ語の研究をまとめたものが、文法のあとにのせられており、その点では非常に有用であるが、動詞の分類や音声表記等に受け入れがたいところがある。彼の表記法は次のとおりである。

p t ɔ tš k	s š h H
p' t' ɔ' tš' q	m n l
b	w y

彼は [k] と [k'] を k, q とし, palatal と velar のちがいとしている。また [ç] と [ç'] を っ と っ' と書いている。っ はそれまで [ç'] を表わす文字として用いられてきたので, これはまずいように思われる。喉音を除くと, 声門音と非声門音を ' のあるなしで区別しており, その点では体系的な表記といえようが, っ, っ' はもちろん, tš, tš' を踏襲する人はいない。H は ah の縮約形のときの音にしかあられわれず, これを音素として登録するのもよくない。しかし声門音に ' を用いることやその他の音の書き方は, アメリカ言語学会が採用している書き方であり, 現代までよく受け継がれている。

1980年, これまでの辞書すべてを一つの辞書にまとめた辞書『*Diccionario Maya Cordemex*』が出版された。ユカタン人の学者 Alfredo Barrera Vásquez が編集にあたったもので, 表記法は彼の文法書 [BARRERA VÁSQUEZ 1946] に従っている。

p	t	ts	ch	k	s	x	h	'
p'	t'	ts'	ch'	k'	m	n	l	
b					w	y		

古典ユカテクマヤ語が主体の辞書であるにもかかわらず, そのような表記法にかえているので, 頭のなかで k は c, ts' は ç を書きかえたものだといちいちおきかえなければならず, 不便であるといえれば不便である。しかし声門音と非声門音のちがいを ' のあるなしで表わしており, その点からいえば, これまでのものの中では一番体系的である。難をいえば, ts, ts' の表記である。それは tz, tz' と改めた方がよいであろう。こちらの方が伝統的であるし, またユカテクマヤ語には t-s というつながりがあるからである。たとえば sat-s-ah は, [satsah] であるのに, [saçah] ととられかねない。

この辞書の書法は, しかしながら, 全面的に受け入れられていない。アルファベットに ' をつけた形に抵抗を示す人がいるのである。現代のユカテクマヤ語の表記法には, この他にもいくつかある。たとえばユカテクマヤ語を学ぶための『*Cartilla Maya*』 [1972] には, 次のような文字が使われている。

p	t	tz	ch	c(qu)	s	x	j	'
p'	t'	dz	ch'	k	m	n	l	
b					w	y		

これは文部省 (Secretaría de Educación Pública) とインディオ研究所 (Instituto

Nacional Indigenista) より発行されており、それゆえ、一応政府の公的機関の表記法とみなすことができる。この Cartilla は夏期言語学研究所 (Instituto Lingüístico de Verano) の協力をあおいでおり、夏期言語学研究所が使っている文字と同じである。つまり聖書の表記法とも同じである。使われている文字には dz あり ' あり x ありといった状態で、これまでの表記法のいいところをとり入れたのかもしれないが、むしろごちゃまぜに入っているといった方が適切であろう。

現在、純言語学的なものにはアメリカ言語学会の音声記号が用いられているが、その他の場合には、コルデメックスの辞書にみられる表記法や、聖書や Cartilla にみられる形、伝統的な書法に従ったもの（この場合、は dz におきかえられている）の、大きく分ければ4つの書き方が許されている。

しかしながら、現代のユカテクマヤ人の多くは、ユカテクマヤ語の表記をしらない。読む必要もないし、書く必要もない。スペイン語の読み書きができれば十分なのである。スペイン語の読み書きができる人でも、ユカテクマヤ語になると全然できない人がほとんどである。筆者がユカタンの小村に滞在したとき、ユカテクマヤ語の聖書をもっている人であった。その人はスペイン語の読み書きができる。聖書はスペイン語の表記に近づけて書かれている。しかし彼は全然読めなかった。筆者がたどたどしいながらもユカテクマヤ語で読むと、なるほどそう書いてあるのかと理解できたのである。彼の場合はまだよい方で、スペイン語の読み書きもできない人がほとんどである。

4. む す び

16世紀から今日に至る正字法に注目して、マヤ人の文字使用の問題を扱ってきたが、ユカテクマヤ語の研究を簡単なながらもたどらざるを得なかった。ユカテクマヤ語の研究は、マヤ諸語のなかでもずばぬけて多く、その文献は Tozzer の時代にすでに700を超えている。もっともその中には、ユカタン史や教義の訳など、純粋なユカテクマヤ語の研究書ではなくユカテクマヤ語にまつわる文献がたくさんはいつているが、他のマヤ諸言語と比べれば、非常に多い。その後も研究は盛んで、現在では入門テープまで手に入れることができる。しかし、ユカテクマヤ人にとって文字とはなにかと問えば、やはり無用の長物という答がかえってくるであろう。古代から文字は一部の階級にしか用いられてこず、それは現在でもかわらない。チラム・バラムの書や『バカブの儀式』などの文学を生んだ伝統が今日に伝わらないのは、いかにも残念である。

最後に、16世紀から今日までの正書法の移りかわりがわかるよう、各書物に使われている文字を一覧表にしてみた³⁾。母音とスペイン語に用いられている文字、たとえば d, f, g などの文字は省いた。この表により、いくつかの変化を読みとることができよう。16世紀から19世紀まで、その正書法は小さな変化を除き、よく守られてきた。小さな変化とは、p と t の声門音と s, w, y の音の書き方である。19世紀の末になると、正書法を改める気運が芽ばえる。もっともそれを大胆に押し進めたのが Carrillo y Ancona であり、彼の改めたうちの dz がのちにひきつがれる。20世紀に入ると、おそらく Tozzer がはじめて使ったと思われるが、今日声門音を表わすためにアメリカ言語学会で採用されている ' がユカテクマヤ語にも登場する。しかしそれは地名や人名などの慣用表記には採用されず、地名や人名は伝統的な表記法のままである。ただしっは dz にかえられている。現在はアメリカ言語学会の音声字母（国際字母）、『*Cartilla Maya*』に用いられている字母、コルデメックスの辞書に用いられている字母、それに伝統的な字母のおおきく分けて4つの表記法が用いられている。一人の人でもあるときは慣用表記を使い、あるときは国際字母を用いたり、場合場合で使いわけている。学問が発達した現在の方がむしろ表記法は混乱しているのである。見方をかえれば、学問の介入が今日の混乱をもたらしたといえないこともなかろう。

後 記

本稿は、日本学術振興会の特定国派遣事業によって可能になった「ユカテクマヤ語の研究」の一部をなす。関係諸氏に感謝の意を表したい。

3) 本表は、ユカテクマヤ語を表わす文字をほぼ網羅しているはずであるが、この他にも違った文字を使ったものがでてくる可能性が、少しではあるが、ある。たとえば、メキシコの国立古文書館の *Tierras Vol-1419* と分類されている土地文書には、[p'] に ph が用いられている。Centro de Estudios Mayas の Otto Schumann によると、[w] に hu が用いられている文書もあるという。

表1 現代ユカテクマヤ語の音素に対応する文字

現代ユカテクマヤ語の音素		p	p'	b	t	t'	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	k'	h	l	m	n	s	ʃ	w	y	?	
文献名																							
Carta	1567	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	ç/z/s	x	u/v	y/i			
Diccionario de Motul ⁴⁾	16c	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h/h'	l	m	n	ç/z/s	x	u/v	y/i			
Diccionario de Vienna	16c-17c	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	ç/z	x	u/v	y/i			
Coronel	1620	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h/h'	l	m	n	ç/z	x	u/v	y/i			
San Buenaventura ⁵⁾	1684	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h/h'	l	m	n	ç/z	x	u/v	y/i			
Beltran	1746 (1859)	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	z	x	u	y/i			
Titles of Ebtun ⁶⁾	17c/18c	p	p	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	s	x	u/v	y/i			
Ritual de los Bacabes	18c	p	p	b	t	th/th'	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	s/z	x	u/v	y/i			
Chilam Balam de Tizimin	18c	p	p	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	s	x	u/v	y/i			
Chilam Balam de Chumayel	19c	p	p/pp	b	t	th/th'	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	s/z/ç	x	u/v	y/i			
Chilam Balam de Tekax	1833	p	p	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	s	x	u/v	y/i			
Chilam Balam de Chan Cah	1839	p	p	b	t	th/th'	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	z/s	x	u/v	y/i			
Chilam Balam de Nah	1896	p	p	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	s	x	u/v	y/i			
Cartas	1840'-1850'	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	z	x	u/v	y/i			
Pio Pérez ⁷⁾	19c	p	pp	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	z	x	u	y			
Ruz	1846	p	p	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	z	x	u	y			
Carrillo y Ancona	1883	p	pp	b	t	dt	tz	dz	ch	dch	c/qu	k	h	l	m	n	z/s	x	u	y			
Pacheco Cruz	1912 (1963)	p	pp	b	t	tt	tz	dz	ch	chh	c	k	h	l	m	n	z	x	u	y			
López Otero	1914	p	p	b	t	th	tz	ɔ	ch	ch'	c	k	h	l	m	n	z	x	u	y			
Tozzer	1921	p	p'	b	t	t'	ɔ	ɔ'	tš	tš'	k	q	h/H	l	m	n	s	š	w	y			
Andrade	1955	p	p'	b	t	t'	ts	ts'	tʃ	tʃ'	k	k'	h	l	m	n	s	ʃ	w	j		?	
Cartilla Maya	1972	p	p'	b	t	t'	tz	dz	ch	ch'	c/qu	k	j	l	m	n	s	x	w	y		,	
Dicc. Cordemex ⁸⁾	1980	p	p'	b	t	t'	ts	ts'	ch	ch'	k	k'	h	l	m	n	s	x	w	y		,	

4) [MARTÍNEZ HERNÁNDEZ (ed.) 1929]

5) [MARTÍNEZ HERNÁNDEZ (ed.) 1929]

6) [ROYS 1939]

7) [Códice Pérez 1949, 1979]

8) [BARRERA VÁSQUEZ (ed.) 1980]

文 献

- ANDRADE, Manuel J.
1955 *A Grammar of Modern Yucatec*. Microfilm Collection of Manuscripts on Middle American Cultural Anthropology, No. 41., University of Chicago Library.
- ANGULO V., Jorge
1970 *Un posible códice de El Mirador, Chiapas*. México: Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- BARRERA VÁSQUEZ, Alfredo
1946 La lengua maya de Yucatán. *Enciclopedia Yucatanense* 6: 205-292.
- BARRERA VÁSQUEZ, Alfredo (ed.)
1980 *Diccionario Maya Cordenex*. México: Ediciones Cordenex.
- BELTRAN DE SANTA ROSA MARÍA, Pedro
1859 (1746) *Arte del idioma maya reducido a sucintas reglas y semilexicon yucateco*. 2nd ed. (1st ed., 1746: Mérida.)
- CARRILLO Y ANCONA, Crescencio
1883 *Historia antigua de Yucatán*. Mérida.
- Carta de Diez Caciques*
1929 Carta de Diez Caciques a su magestad el rey don Felipe II, 1567. In Juan Martínez Hernández (ed.), *Diccionario de Motul*, pp. 57-61.
- Cartilla Maya*
1972 *Cartilla Maya*. México: Secretaria de Educación Pública y Instituto Nacional Indigenista.
- Chilam Balam de Chan Cah*
1982 *Manuscrito de Chan Cah*. México: Grupo Dzibil.
- Chilam Balam de Chumayel*
1913 *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. G. B. Gordon (ed.), University of Pennsylvania.
1967 *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. Ralph L. Roys, trans., University of Oklahoma Press.
- Chilam Balam de Nah*
1981 *Manuscritos de Tekax y Nah*. México: Grupo Dzibil.
- Chilam Balam de Tekax*
1833 En el Museo Nacional de Antropología de México. MS.
1981 *Manuscritos de Tekax y Nah*. México: Grupo Dzibil.
- Chilam Balam de Tizimin*
1980 *El libro de Chilam Balam de Tizimin*. Austria: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.
1982 *The Ancient Future of the Itza*. Munro S. Edmonson, trans., University of Oklahoma Press.
- Códice Pérez*
1949 *Códice Pérez*. E. Solis Alcalá, trans., Mérida: Imprenta Oriente.
1979 *The Codex Pérez and the Book of Chilam Balam of Mani*. Eugene R. Craine and Reginald C. Reindorp, trans., University of Oklahoma Press.
- CORONEL, Juan
1929 (1620) *Arte en lengua de maya recopilado y enmendado*. In Juan Martínez Hernández (ed.), *Diccionario de Motul*, pp. 3-53. (Originally published in 1620: México.)
- Crónica de Calkini*
1957 *Códice de Calkini*. Alfredo Barrera Vásquez, trans., México: Biblioteca Campechana.

Diccionario de Vienna

ca. 1625 Bocabulario de Mayathan por su abecario. Manuscript in Nationalbibliothek, Vienna.

LANDA, Diego DE

1938 *Relación de las cosas de Yucatán*. Héctor Pérez Martínez, Introducción y notas, México: Editorial Pedro Robredo.

LIZANA, Bernardo DE

1893 (1633) *Historia de Yucatán*. Museo Nacional de México. (1st ed., 1633: Valladolid.)

LÓPEZ DE COGOLLUDO, Diego

1957 (1688) *Historia de Yucatán*. Ignacio Rubio Mañe, Introducción y notas, México: Editorial Academia Literaria. (Originally published in 1688: Madrid.)

LÓPEZ OTERO, Daniel

1914 *Gramática Maya*. Mérida.

MARTÍNEZ HERNÁNDEZ, Juan (ed.)

1929 *Diccionario de Motul, maya-español*. Mérida.

MEANS, P. A.

1917 *History of the Spanish Conquest of Yucatán and of the Itzas*. Papers of the Peabody Museum, Vol. 7, Harvard University.

PACHECO CRUZ, Santiago

1963 (1912) *Compendio del idioma maya*. 6th ed. (1st ed., 1912: Mérida.)

Relaciones de Yucatán

1983 *Relaciones histórico-geográficas de la gobernación de Yucatán*. Mercedes de la Garza, et al. (eds.), Universidad Nacional Autónoma de México.

Ritual de los Bacabes

1965 *Ritual of the Bacabs*. Ralph L. Roys, trans., University of Oklahoma Press.

ROYS, Ralph L.

1939 *The Titles of Ebtun*. Carnegie Institution of Washington, Pub. 505.

RUZ, Joaquin

1846 *Colección de sermones*. Mérida: Imprenta de José D. Espinosa.

THOMPSON, J. Eric S.

1971 *Maya Hieroglyphic Writing*. 3rd ed., University of Oklahoma Press.

TOZZER, Alfred M.

1921 *A Maya Grammar*. Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University.

八杉佳穂

1982 「マヤ文字の言語」『国立民族学博物館研究報告』7(3): 514-533.

ZIMMERMANN, Günter

1970 *Briefe der indianischen Nobilität aus Neuspanien an Karl V und Philipp II um die Mitte des 16. Jahrhunderts*. Hamburg: Beiträge zur mittelamerikanischen Völkerkunde X.